赤い手袋

松の慎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
赤い手袋

【Ｎコード】
Ｎ４１３０Ｅ

【作者名】
松の慎

【あらすじ】
雪が降る中駅のホームまで走った。伝わらない思い、一生消えない悲しみ。今でもフラッシュバックが起きて倒れてしまう。赤い手袋の女の子・えみのおかげで明かされる康介の過去。そんな康介に一樹が手を差し伸べた…。

好き　のたった2文字が言えなくて。

忘れないで　とワガママを言えなくて。

雪が降る降るこの田舎から、高校を卒業したばかりの俺の前から永遠に消えた。

「よーっす、康介！」

「うす。朝っぱらから元気だな、一樹」

朝歩いている俺に元気よく声をかけてきたのは大学入って以来ずっと親友の一樹。

俺は地元だけど、一樹は東京からやってきた。

東京と比べたらこんなところクソ田舎すぎるのになんで？と聞いたら、一樹は少しだけ寂しそうに「逃げたかったんだ」と言った。

そのとき一樹からいろいろ聞かされた。

一樹の恋について。

いろいろ大変だったらしく、どうしても東京から離れたかったと一樹は微笑しながら言ったのを今でもよく覚えている。

「にしても今日は寒いよなぁ」

一樹がハーッと息をはくと、白くなる。
6月に入って梅雨入りする時期なのに、最近はわりと寒い。
なかでも今日の寒さは特別だ。

「異常気象起きすぎだよなぁ」

俺が笑って言うと、一樹もワハハと笑った。

「確かに！これじゃあ3月並みだよ」

3月、という言葉にハッとさせられる。
忘れられるわけがない。
人生で一番忘れられない月だった。
高校生活がけっこう好きだったから卒業したくなかったし、みんなと離れ離れになりたくなかった。
地元に残る奴もけっこういるけど、遠くへ行く人もいた。
そしてあいつは、電車のホームで泣きながらいなくなっていった…

「…け？おい、康介？」
「えっ？」
「え？じゃねーよ。どうかした？」
「あ…いや」

一樹は心配そうに俺の顔を覗き込んだけど、俺は大丈夫大丈夫と笑ってみせた。

なに考えてるんだろ、俺。
もうずっと前のことじゃないか。

俺はもう大学４年生で、今年は卒業して就職もする。
内定も決まって、新世界を切り開こうとしているんだ。

３月なんて、あのときから何度も訪れた。

それでも、思い出すことはなかった。

けど、今日は特別だと思った…

「うおっ、雪！」

空からパラパラと降ってくる雪。

こんな時期はずれに降るはずがないのに、今現に振っている。
道行く人はみんなキャーキャー嬉しそうに騒いでいる。
一樹も時期はずれの雪に有頂天だ。

「…雪……」

手のひらをそっと上に向けてみると、雪は俺の手にのって、やがて消えていった。
そう、今日特別なのはこれのせい。
あの日もこうやって雪が降っていたんだ。

「積もるかな？」
「どーだろ。積もったら雪合戦しようぜ」
「お、いーな！」

雪が降って
電車の上には積もっていて
電車に乗ろうとしているあいつの目から涙が流れていて

走ってきた俺の頭には雪がのってて

反対ホームにいる俺は、あいつの腕を掴むこともできず、あいつが
行ってしまうのを見ていることしかできなかった。

電車はゆっくり走り出し

俺も一緒になって走ったけど

ホームの角まで来てもう追いかけられなくなって

あいつは口パクでなんか言っていて

いつか電車は見えなくなって

俺はその場でしゃがみこんで

嫌ってほど泣いた。

「そういえばお前彼女と別れたんだって？」
「ああ、まぁなー」
「なんでまた。けっこうラブラブだったじゃん」

「いや、あいつ内定が県外の…わりと遠いとこに決まってさ」
「振ったのか?!」

俺が勢いよく言うと、一樹は手を振りながら「まさかっ!」と言った。

「向こうからだよ。やっぱ離れるのは嫌なんだって」
「でもそんなんまだまだずっと先じゃん」
「卒業まで一緒にいて、思い出をこれ以上増やして辛い思いをするのは嫌なんだって…泣いてそう言われたんだ」

なんで…

やっぱり離れたら一緒にいれないのか?

好きって気持ちだけじゃどうしようもないのか?

「お前はそれで良いのか?」
「よくない…けど、でも俺も正直遠恋なんて自信ないし…」
「…そっか」

どうして人は人を好きになるんだろう。

人を好きにならなければ、別れのとき寂しくなんかないのに。

…それでも人を愛さずにはいられないってこと、よく分かってる。

涙ぐむ一樹に俺は肩に手を置く。
言葉なんかはない。

一樹がどんなに彼女を好きだったか、彼女がどんなに被きを好きだったのかを俺はよく知っている。

だからこそ、下手な言葉はかけられない。

それでも一樹は俺のへたくそなメッセージを受け取って「ありがとう」と弱弱しく言った。

どれほど

人がこんな思いをすれば良いのだろう。

何人の人がこうやって傷つけば終わりが来るのだろう。

傷つかない恋愛はありえないかもしれない。
両思いだけの恋愛なんて到底ない。

けれど、それでも願ってしまう。

みんながみんな幸せなら…と。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「あっれー、一樹がいねぇ」

昼休みになって一樹と一緒に飯を食おうと思って探してみたけど、なかなか見当たらない。

ふと外を見ると、雪が少しずつ積もっている。

雪合戦できるほどじゃないけど。

「あ、一樹くんなら向こうにいたよー」

「まじ？さんきゅー」

友達が俺にそう声をかけてきたから、俺は言われたほうへ行ってみた。

すると、一樹が知らない女の子と一緒にいるのが見えた。

新しい彼女か？とも思ったけど、そんなはずはないか。

どうしようか迷っている俺に一樹が気づき、大きく手を振った。

「おーい康介！こっち来いよー！」

女の子は少し慌てたような様子をしていたが、俺は構わず2人のもとへ向かう。

近くで見ても、やっぱり知らない女の子。

「な、康介彼女いないだろ？」

「？ああ」

「この子が康介のこと気になってるみたいでさ」

「わわっ、ちょ…一樹くん！」

ああ、なんだ…そういうことか。

て、なんで俺こんなに冷静なんだろう。

「あ、あの…あたし日向えみって言います。と、友達になってもらえませんか？」

顔を赤くして女の子は言う。

大学に入ってから何人目だろう。
高校のときも何回か告白はされたけど、やっぱり大学となるとその数は歴然の差。
人数も多くなるしいろんな奴が集まるから当然なんだろうけど。

「友達なら全然」

スッと俺が手を出すと、女の子も手を出した。
出してきたその手には赤い手袋。
反射的に俺は女の子の手をパンッと払いのけた。

「えっ…」

女の子のかなり驚いた顔が目に写るけど、俺の頭の中はフラッシュバックしていてそれどころではなかった。

グルグルと駆け巡る記憶が、俺に貧血を起こさせる。

女の子の後ろにある窓から見える雪

女の子の赤い手袋

俺を壊すにはそれだけで十分だった。

一樹の俺の名前を呼ぶ声が遠のいていくのだけ感じた。

『康介くん、…あたし大阪行くの』

『えっ…?！大阪って…なんで！』

『大阪にいるおばあちゃんがね、おじいちゃんを亡くして1人になっちゃうから家族で大阪に引っ越すことにした…』

『でっ、でも！大学なんて1人暮らししてる奴いっぱいいるじゃん！』

『だめなの…。おばあちゃんの孫はあたしだけで、おばあちゃんあたしに会えるのすごく楽しみにしてて、おじいちゃん死んでからずっと落ち込んでたけど…あたしと一緒に住めるようになるって知って元気取り戻してきたの』

ああ…いつだっけ。

なんでそんなこと言うんだよ。

せめて俺が推薦で大学受ける前に言えよ。

推薦で受かったら理由がどうであれ大学を蹴ることはできない。

推薦を受ける前だったら俺、県内の大学の推薦なんて受けなかった。

『なんで…なんでもっと早く言わねぇの？』

違う。

俺にそんなこと言える義理はない。

だって俺ら付き合ってすらいなかったんだ。
中学からずっと一緒のクラスで、なにかと腐れ縁でもう一緒にいることが当然のようになっていた。
…言葉なんかいらないと思っていた。

『言ったら…康介くんの夢の邪魔しちゃうから』
『そんなの！大阪でだって夢は叶えられるよっ！！』
『大阪の国立には行きたい学部ないでしょ』
『んなもん公立だって私立だって構うもんか！』

お前が傍にいるのなら。

『…だめ。あたしのせいでそんなことさせたくない』

好きだ
好きだ
好きなんだって

全身で叫べたらどんなに幸せか。

行くなって

傍にいろって

言いたいけど、言えない。

『…っ……好きにしろっ！』

ケンカ別れとはまさにこのことを言うのだろう。

謝りのメールも電話も一切聞き入れず

直接会うことすら避けた。

残りの時間は少ないって分かってたのに

バカな俺は自分の意固地のために大事な時間を無駄にした。

あいつが出発する日すら、知らなかった。

あいつの親友にその日の朝聞くまでは。

「……け！…すけ！」

遠くから聞こえる声。

なんだ…俺の名前を呼んでいるのか？

「康介！おいっ、大丈夫か？！」

一樹の大声で目が覚めた。

ムクッと起き上がると、見慣れない部屋のベッドの上に俺は寝ていたらしい。

キョロキョロしていると、一樹が「ここは保健管理室。高校でいう保健室みたいなとこ」と補足した。

そうだ、俺倒れたんだっけ…

どのくらい眠っていたんだろう。

「かず…き。今何時？」

「3時ちょい前」

「げ…俺そんなに寝てたのか。あ、わりぃ一樹。もしかしてずっと付いててくれたのか？」

「当たり前だろ。うなされてたけど平気か？」

一樹は優しい。
今朝泣いてたくせに、今はもう俺のことばっかり。
一樹は俺に全部話してくれるんだ。
昨日のこと、楽しいこと、悲しかったこと、恋愛のこと…
俺も一樹と一緒にいるのが楽しいから、いろんな話をする。
けれど、決して言うことはなかった。

「…な、お前の恋愛の話とか一切聞いてなかったよな」

季節は巡り
誕生日
クリスマス
正月
バレンタインデー
ホワイトデー

恋人たちのイベントはいくらでもある。

「いや、聞いてもいつもはぐらかされてたような気もする。告白し

てくる子もことごとく振ってきたしさ」
「話すタイミングがなかっただけだよ。告白されても好きじゃない子とは付き合わない主義なんだ」
「じゃあ好きな奴いるのか？」

一樹の単刀直入な質問に、一瞬ビクッとする。

「い……」

別に黙ってる必要はない。

一樹は大事な親友なんだから話すのが当然。

けど

けど…

「い？」

顔から血の気が引くのが自分でも分かる。

いつもそうだ。

思い出そうとするたびこうやって気分が悪くなる。

「お、おい？顔色悪いぞ」

一樹が俺に手を伸ばした。
それがさっきの女の子の手をカブって見える。

「やっ…やめっ…」

俺はすぐに掛け布団で身を隠した。
ただの手なのに
いつもの一樹の手なのに

ダメなんだ。

一度思い出したらなかなか消えない。

「康介…」

分かる。
一樹が俺のことを心配してくれてるって。
なのにどうしても体が拒否しようとする。

「赤い手袋が嫌なのか？」

一樹の問いに、震えている俺は答えられずにいる。
すると一樹は続けて言った。

「前にバレンタインにお前に告白した女の子…お前に赤い手袋をプレゼントしたそうだな。お前は良いと断ったそうだけど、女の子が冗談半分で無理やりお前に手袋はめたら嘔吐したって」

そういえばそんなこともあった。

赤い手袋を見るだけなら全然大丈夫なんだ。

けど、それを手に付けてるのを見るのも実際に俺が付けるのもダメなんだ。

たかが手袋だけど…

そのときは雪はなかったから、今日ほどあの日と重なって見えなかったら嘔吐だけで済んだって話なだけで。

「言えよ、康介。じゃなきゃ俺お前のこと守ってやれねぇじゃん」
「…俺は男だぞ。男に守られてたまるか」
「あほ。こんなにも震えてるくせに」

背中超しに聞こえる一樹の声。
言えば楽になれるかもしれない。
俺自身も、なんでこんなに拒否反応が出るのか分からない。
それほどまでに未練が残っているのか。
もう…もう3年以上経ってるんだぞ。
あいつだって向こうで彼氏作って幸せにやってるはず。

「…なんで俺だけ……」

なんで俺だけ幸せになれないんだろう。
別に好きな人を作らないわけじゃない。
できないんだ。
女の子を見てもなんとも思わない。
告白されても付き合いたいって思えない。

「俺だって……」

今、あゆみはどうしてるんだろう。

俺みたいにズルズル過去を引きずってるのか。

あの日以降連絡も取っていない。
もうアドレスを変えているかもしれないけど、一応俺のアドレス帳には入っている。

大阪に行く機会もないし
きっとあいつもこっちに戻ってこない。

ずっとずっと会うことはない。

「…一樹、俺仲の良い女の子いたんだ」

話してしまおう。

もしかしたら話してしまえばもう苦しまなくてすむかもしれない。

さっさと忘れて…せめて思い出にして、思い出しても平気なようになりたいんだ。

俺はその女の子との関係、大学のこと、そしてケンカしたまま一切話すことなく彼女の出発日を迎えたことを詳しく話した。

落ち着きを取り戻して俺は掛け布団を取り、後ろを振り向いて一樹

の顔を見ながら話し始めるようになった。

「あの日…あゆみの親友の子が朝、突然俺に電話してきた」

早朝も早朝だった。
なんせ始発で出発するときたから。

『康介くん！良いの？このまま離れて』
『別に…』
『素直じゃないな！あゆみ今日出るんだよ？！』
『えっ、今日…？』
『始発だよ！もう出ちゃうっ！！はやく言ってあげて！！』

携帯超しのその子の声は、怒りに満ちているようにも感じられた。
あゆみがこの町を出て行ったらきっともう会うことはない。
そう思うと、体がゾクッとした。
とにかく急がなきゃと思って外に出ると、雪が積もっていて尚も降り続いている。
たまにしか降らないくせに、なんでこういうときに限って降るのか。
積もっているせいで自転車を走らせることができないから、全力で

走った。

駅のホーム

息を切らし
途中滑りそうになりながら
電灯が付いている駅がようやく見えると、カンカンカンと電車が来る音が聞こえ始めた。

急いでホームへ駆け上がると、ホームの椅子にはあゆみと、あゆみの父さん母さんの3人が椅子に座っていた。

電車が近づくと3人は立ち上がる。

『あゆみっ…！！』

反対ホームにたどり着いた俺は、あゆみに向かって思い切り叫んだ。

『こっ…』
『あゆみ！俺、俺っ…！！』

言いたいことは山ほどあった。

ごめんも、ありがとうも

好きも

なにも言えてない。

俺の声は電車の音によってかき消される。

電車が駅に止まり、あゆみたちの姿が見えなくなる。

それでも俺は叫んだ。

あゆみの名前を。

電車の中にあゆみの姿が見えた。

閉まっているドア超しに見える、久しぶりに見るあゆみ。

『あゆみ！俺、なにも言ってねぇんだ！！』

少し遠いけれど、あゆみはドアにはいつくばっているのが分かる。

俺になにか言おうとしている。

口パクでなにかを訴えている。

けれど聞き取ることができない。

『……好きだ！！ずっとずっと、好きだからな！！！』

きっと俺の声も届かない。

泣いているあゆみは、ドアの窓を手で叩く。
赤い手袋をしているあゆみの手が。

お互いなにを言っているのか分からない。

届かない思い。

そのまま電車は発車して

俺は追いかけたけれど、結局電車は俺の手の届かないところへと向かって行ってしまった。

俺はその場で倒れるようにしゃがみ込み、誰もいない、ただ雪が降り続けるホームの床を手でドンドンと叩きつける。

『くそっ…くそぉっ！！！』

自分から突き放して遠ざけていたのに
これじゃああまりに惨めすぎる。

言いたかった言葉はなに1つ言えなくて。

結局俺はホームをあとにして泣きながら家へ帰った。

「赤い手袋は…あいつを思い出すんだ。頭の中でそのときの映像が流れて…フラッシュバックっつーのかな…」

メールも無視して
電話にも出ないで

思い切り拒否したのは俺なのに

たった1つの事実に意固地になって、一生消えない悲しみを勝手に作って、それで苦しんでるなんてバカすぎる。

「っあー、ほんっとバカだよな俺」

ハハハと笑ってみせた。

すると一樹は、辛いときに無理に笑う必要はねぇよと優しく言った。

そういうこと言われると、泣けてしまう。

俺が悪いのに、だから俺がどんなに傷ついたって構わないはずなのに…

どうして人間ってこんなにももろいんだろう。

「電話でもしてみれば？」
「だれ、…あゆみに？」
「うん。すっきりさせれば良いんじゃない？」
「でも…あいつにとってはきっともうとっくに終わってる話で…」

口ではそうは言うものの、内心はそうしたいと思う。

けど、きっと迷惑だ。

今もう俺らは大学４年で、過去も良いところなのに、俺のワガママであいつにとっても苦い思い出である俺からの連絡なんて望んでない…と思う。

「良いじゃん、話くらい。だってきっとお前ら相思相愛だったんだよ」

そうだろうか。

良いのだろうか。

もう、終わった恋なんだよな。

…そう、終わらせなきゃならない。

懐かしさに惹かれていつまでも引きずってはいけないんだ。

携帯に手をかけた、そのときだった。

保健管理室のドアがガチャと開いた。

「あの、大丈夫ですか？」

さっきの女の子だ。

心配して見に来てくれたんだ。

「あ、日向さん。康介の前ではその手袋取ってて」

「え？」

一樹の言葉に彼女はキョトンとした。

「…良いよ、一樹」

そして俺は日向さんに「ちょっとこっち来てくれる？」と手招きした。

彼女は不思議そうに俺に近づいてくる。

赤い手袋

またフラッといきそうだったけど、グッとこらえて日向さんの手をギュッと掴んだ。

「えっ？！あ、あのっ？」

「ごめん、ちょっと助けて欲しいんだ」

そうして俺は右手は日向さんの赤い手袋を付けている手を握り、左手で携帯を操作する。

トゥルルル…と部屋中に響く。

そのうち、何回かコールしたあと「もしもし…康介くん？」という懐かしい声が聞こえてきた。

中学、高校でのあゆみとの思い出は腐るほどある。

嫌ってほど一緒にいたんだ。

どれも、俺にとっては素敵な日々だった。

「…久しぶり。元気？」

『うん。康介くんも元気？』

「ああ」

シーンとなる。

なんと言葉をかけたら良いのか…

先に口を開いたのはあゆみだった。

『あの日のこと、覚えてる？』

「え？あ、ああ」

『あたし、電車の中で康介くんのことずっと好きだって…忘れないって言ったの。でも聞こえなかったよね』

「俺も言った。ずっとずっと好きだ…って」
『うそ…』
「うそじゃないよ」

一樹の言うとおり、やっぱり思いあっていた。
いや、そんなことは一緒にいるときから分かっていたことだった。

「今は…彼氏とかできた？」
『去年から付き合ってる彼がいるの。康介くんは？』
「今はいないかな。でも候補はいる」

俺はチラッと日向さんを見た。

『そっか…。お互い新しい恋見つけたんだね』

電話越しであゆみはフフと笑う。
つられて俺も笑った。

「ごめんな。ずっと謝りたかった。それと、ありがとう」

楽しかった日々、忘れない。

もっとずっと一緒にいたかったけど、でも今となっては良い思い出。

あの頃の俺たちは本当に幸せだった。

幸せじゃなくなった俺は、抜け殻の毎日を送った。

しばらく会話をしたあと、電話を切った。

携帯をポケットにしまい、一樹に言う。

「一樹、ありがと。すっきりした」

俺がそう言うと、一樹は満天の笑みを浮かべた。

「あ、あの…北島くん」

「ん？」

「あ…手を」

日向さんは恥ずかしそうに言った。

手を握っていたことをすっかり忘れていた俺は、慌てて手を離した。

「わっ、ごめん！」
「あっ、ううん。気にしてないよ」

これも新たな恋の始まりだろうか。

ずっと恋してなかったから、どうやって人を好きになるか忘れちゃった。

けど、けどさ

今日は寒くて雪が降っていて

偶然赤い手袋をした女の子が俺に近づいてきた。

って、それだけじゃダメ？

「ねぇ、えみ。俺えみと仲良くなりたいかも」
「えっ…」

過去のことはもうどうしようもないけれど

未来は俺自身が作れるんだ。

明るい未来も暗い未来も、俺の手1つにかかっている。

それなら、せめてあの頃は…って笑ってられるような自分がいる未来を作ってみたい。

俺はえみの左手の赤い手袋をはずし、自分の手に付けてみた。

女の子のだからちょっと小さくて俺の手には入りきらない。

けど、もう付けても大丈夫。

不思議なくらい心がすっきりしているんだ。

「俺にも赤い手袋編んでよ」

ニヒヒと子供っぽく笑ってみせる俺

久しぶりに世界が明るく見えたんだ。

fin

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4130e/

赤い手袋

2010年10月11日12時57分発行